



(寺河内美奈撮影)

「寺田真理記念・日本研究賞」授賞式

ケビン・ドーク氏受賞

日本への理解増進のため内外のすぐれた日本研究を顕彰・奨励する「寺田真理記念・日本研究賞」の第1

回授賞式が8日、東京都内で行われ、米国のケビン・ドーク米ジョージタウン大学教授(54)が受賞した。

同賞は日本が直面する問題に向き合い、再生のための提言を続けている民間シンクタンク公益財団法人「国家基本問題研究所」(櫻井よしこ理事長)が、活動に共鳴する寺田真理氏からの寄付を原資に創設した。ドーク教授は日本のナ

ショナリズムを国民の連帯に基づく「民主主義」だとして肯定的に評価し、日本研究に新しい光を当てた。

このほか、中国の劉岸偉東京工業大教授が特別賞を、米国のブランドン・パーマー米コースタル・カロライナ大准教授とロシアのワシーリー・モロジャコフ拓殖大教授が奨励賞をそれぞれ受賞した。日本研究賞と特別賞に1万ドル、奨励賞には5千ドルの賞金が贈られた。

きょうの人

「日の丸や君が代のもと、国民は一体になる」

色の強いシカゴ大に進み、博士号を得た。独特の経験が独自の視点を育むことになる。

「日本のナショナリズムは、民族ではなく国民の連帯に基づく健全なもの。日の丸や君が代のもとで一体になる市民的ナショナリズムだ」と肯定する。

首相による靖国神社参拝も、中国や韓国の批判に動じる必要はないと説く。

「外交官は摩擦を嫌うが、学者である私は

何が正義かを考える。正義を貫けば衝突はあるものだ」

東大や甲南大などいくつもの日本の大学で研究し、25歳と23歳の息子たちは神戸で公立小学校に通った。「なんでやねん」という言葉を息子と辞書で真剣に探したのもいい思い出だ。日本研究賞受賞を「大変名誉なこと」と謙虚に喜ぶ。来年は京都の国際日本文化研究センターに籍を置く予定だ。(坂本英彰)

「日本とは何か」追究 米大学教授

「とても面白いから行きなさいね。約束よ」

交換留学で日本から帰ってきた女学生と交わした言葉が、米首都ワシントンのジョージタウン大学で教壇に立つ日本研究者の原点となった。海さえ見たことがなかった中西部イリノイ州の高校生は37年前、「映画のようだ」と思いながら羽田に降り立った。

長野県上田市で学生服を着て学校に通う。中国、韓国と日本の区別もつかなかったのに、1年後には日本の大学への進学を考えた。親の反対で帰国はしたが、「日本とは何か」を究明する道へ。大学では日本に親しみを抱く反共産主義者の韓国系教授に日本史を学び、大学院は一転して、日本研究では左派